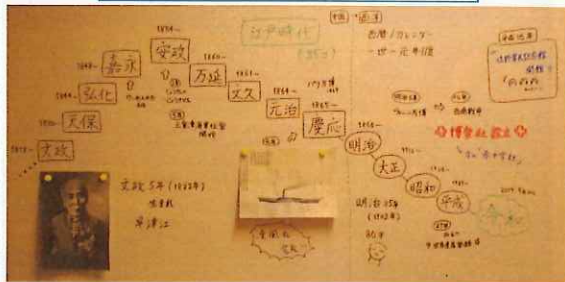


Statistica Wiener
Extrablatt.
Von Sano Tsunomiya, bei Sano'scher Buchhandlung.

ウイナーエキストラブラッド紙

- ・黄色い肌で、賢そうな切れ長の目をした極東の**小柄な人種**
- ・アジアの同胞うちでもいち早く**西洋的なもの**に親しんだ
- ・他の民族は伝統的生活様式を**崩す気配**を示さなかった
- ・だが日本人は違う。欧州の生活習慣を体験するや否や、**何かを学ぶ気**になった
- ・全く新しい物と引き換えに昔ながらの習慣を深く捨てるという**姿勢は日本人のみ**に見られる。

元号と佐野常民 81歳 (数え年) の生涯



江戸時代45年間 | 明治時代35年間

文政5年(1822)12月28日誕生 | 明治35年(1902)12月7日没

肥前佐野常民

- ・文政5年(1822)12月28日 下村充賢 の5男
- ・天保3年(1832) 藩医 佐野常徴 の養子となる
- ・九代藩主 鍋島齊直 から 名を賜る



大正15年(1926) 佐賀市川副町の生誕地に碑が建立された

◎ 幕末--45年間 · 明治--35年間

- ・ 25~30歳--蘭学修行 (遊学)
- ・ 31~44歳--精煉方 (理化学研究) 海軍伝習 (長崎・三重津)
- ・ 45~54歳--万国博覧会 (パリ・ウィーン)
- ・ 55~81歳--赤十字 (博愛社・日本赤十字社)

佐野常民



弘道館

- ・天保五年(1834)に弘道館の外生翌年内生に進む
- ・勉学において頭角を現す




均子

二十歳 結婚



緒方洪庵



廣瀬元恭

Then he enrolled in Koan Ogata's Tekijuku school and finally studied under Genboku Ito, another

華岡青洲が開いた (春林軒塾)

伊東玄朴

精煉方(はいれんかた)

田中久重
田中儀右衛門
石黒寛次
中村奇輔

長崎海軍工廠 佐賀造船所

●三浦洋海軍所
・1858(安政5)年創設
・佐賀藩海軍の誕生
・電流丸、飛雲丸、鼓風丸、觀光丸(精製蒸気船)
・凌風丸の完成

慶応3年(1867)3月
パリ万国博覧会参加のため
長崎を起航

・団長 佐野常民
・小出千之助・深川長右衛門
・野中元右衛門・藤山文一

赤十字社パリオロン

パリ万国博覧会会場

・明治5年(1872)10月ウイーン万博副総裁就任
・"6"(1873)2月 横浜から出航
・"7"(1874)7月 帰国

戦場において傷ついた者は、
敵味方の差別なく救護する。

文久3年(1863)2月
ジュネーブで5人委員会発足

明治10年(1877)2月
西南戦争勃発

博愛社創設許可の図

明治10年(1877)5月1日許可



明治10年(1877)5月1日
博愛社設立許可

明治19年(1886)6月ジュネーブ条約加入
明治20年(1887)5月 日本赤十字社に改称 初代社長となる

博愛は人の至性に基ずく

人々は文明開化の象徴として
法律の完備や機械の発達を挙げるが
私は赤十字のような人道的国際組織
の発展こそ、文明進歩の証拠と考えた。

20



明治27年(1894)7月 樞密院閣議

明治28年(1895) 伯爵を授かる

明治29年(1896)7月 元老院議員に就任

(全国の灯台の写真)



明治4年(1871)工部省灯台課設置
灯台建設に携わった期間
明治4年5月16日開港
伊勢湾の海難を防止し、航海を導き、
全開港場の灯台を竣工、完成

明治4年(1871) 工部省灯台課設置
灯台建設に携わった期間
明治4年5月16日開港
伊勢湾の海難を防止し、航海を導き、
全開港場の灯台を竣工、完成

博覧会男

内閣勸業博覧会
第一回(1873) 東京上野公園
第二回(1876) 東京上野公園
第三回(1877) 東京上野公園
第四回(1883) 東京上野公園
第五回(1889) 東京上野公園


◎龍池会の設立 (明治12年1879) ・有栖宮徳仁親王(皇孫)佐野常民侯爵
・欧米風潮に危機感を持ち日本美術工業保護・奨励を図る
・【日本美術協会】へ改名 (明治20年1887)

◎京都教済 (明治2年3月1869) ・天皇京都御所を離れる(東京へ遷都)
・明治維新前人口は30万人超。明治7年に22万人に落ち込む
・奥私邸取り崩しが激進。若者負担が有力者を集め「保勝会」を組織(明治14年)
・第四回 内閣勸業博覧会開催(明治28年1895)
・貧民救済が完成。失業事業開始。語学展覧会の開催。
・共通歩数機。ガイドブックの作成
・平安京遷都千年を記念し平安神宮の建立、時代まつりの開催を主導




伊藤忠重の窮民に尽力
長崎海軍造船所(後の三菱重工)に働き、
佐野常民侯爵(明治12年)に「日本美術協会」を
設立の機軸(明治12年)を担った(明治14年)
「暗夜に灯火を掲げる思い」
古来稀な偉人として、東洋の学術界から
大政官へ、爵位の昇格を「師の建立」
を切望
「明治29年(1896) 東京上野公園内 丸山」
「明治29年(1896) 東京上野公園内 丸山」
「明治29年(1896) 東京上野公園内 丸山」

◎龍池会の結成-----明治12年(1879)
◎日本美術協会と改称-----明治20年(1887)



◎大隈重信公の評価『大隈伯爵日譚』
○『かの我が国古来の名畫(めいが)并(なら)びに珍器等の類(しき)りに外國に流失するに際し、人の未だ是を意とせざる時に、早く之を救済すべきの叫聲(きようせい)を挙げたるは彼[-佐野]なり』
○『今日に至っては一般に美術は文明の裝飾品にして、完全なる邦家(ほうか)を構成するに決して缺(か)くべからざる必要の物なることを知るに至りしは、多くは彼[-佐野]の恩澤(おんたく)なり』



・創立25周年式典(上野公園)
 ・明治35年(1902)10月21日
 ・皇后陛下行啓
 ・全国の社員数80万人
 ・佐野と大給は名誉社員に推薦




博愛 これを 仁 という



東京高輪 最晩年 澤川善次郎



・明治35年(1902)12月7日 没
 ・12月12日 日本赤十字社葬


佐野家墓所【東京都山手区2018/10/26】







現在の三重津海軍所跡



佐野市民記念館

三津江川

The Mitsu Tsu site in the Meiji era actually were characterized by an incorporation of Western technology and the innovative application of Japanese traditional techniques.

明治日本の産業革命遺産

『明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業』構成資産分布図

九州・山口・岩手・静岡
 8県 11市 構成資産23件

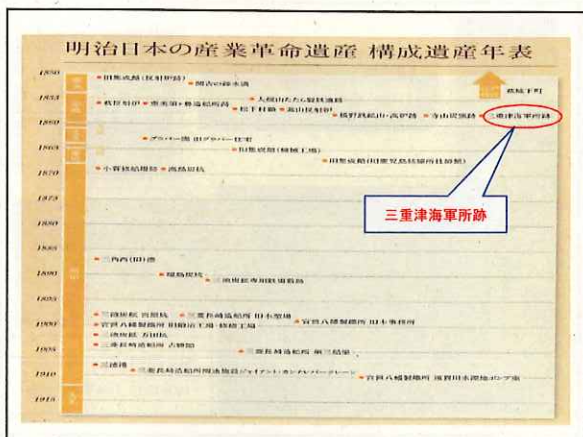
山口県萩市
 山口県宇布岐町
 山口県下松市
 山口県美祿町
 山口県萩市
 山口県宇布岐町
 山口県下松市
 山口県美祿町

静岡県伊豆の国市
 静岡県山岡町

佐賀県佐賀市
 三重県志摩市

国際記念物遺跡会議 (ICOMOS) による勧告
 2015/7/8日 登録





乾船渠(ドライドック)遺構

- 在来技術と西洋技術を融合させた造船の近代化を伝える遺跡
- 日本最古のドライドックは「木」と「土」でできていた!
- カタチは西洋。技術は日本!

◎ 現存する日本最古の洋式船の修理 建造 施設

35

星とたんぽぽ 金子みすゞ

青いお空のそこふかく、
海の小石のそのように、夜がくるまで沈んでいる、
昼のお星はめにみえぬ。
見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。

ちつてすがれたたんぽぽの、かわらのすきに、
だアまって、春がくるまでかかっている。
つよいその根はめにみえぬ。
見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。

Illustrirtes Wiener
Extrablatt.

Eigentümer und Herausgeber: **D. J. Berg** und **D. O. Wagner.**

Verlag des Verlegers
 in Wien, am
 1. August 1874

Verlag des Verlegers
 in Wien, am
 1. August 1874

Verlag des Verlegers
 in Wien, am
 1. August 1874

Verlag des Verlegers
 in Wien, am
 1. August 1874

Wien, Donnerstag, 20. August 1874

3. Jahrgang

<p>Notiz: In der ersten Ausgabe des Extrablatts sind die Nachrichten über die Ereignisse in der Provinz Ostgalizien, die in der ersten Ausgabe des Extrablatts sind, die in der ersten Ausgabe des Extrablatts sind, die in der ersten Ausgabe des Extrablatts sind.</p>	<p>In der ersten Ausgabe des Extrablatts sind die Nachrichten über die Ereignisse in der Provinz Ostgalizien, die in der ersten Ausgabe des Extrablatts sind, die in der ersten Ausgabe des Extrablatts sind, die in der ersten Ausgabe des Extrablatts sind.</p>	<p>In der ersten Ausgabe des Extrablatts sind die Nachrichten über die Ereignisse in der Provinz Ostgalizien, die in der ersten Ausgabe des Extrablatts sind, die in der ersten Ausgabe des Extrablatts sind, die in der ersten Ausgabe des Extrablatts sind.</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

Sano Tsunetami, den japanesische Gesandte.



1874 (明治7) 年8月20日付

「ウィナーエキストラブラット」紙 和訳文

日本国公使、佐野常民

黄色い肌で、賢そうな切れ長の目をした極東の小柄な人種は、アジアの同胞のうちでも一速く西洋的なものに親しんだことが驚嘆に値し、世界万国博覧会以来、我々にとっても非常に身近な存在となった。

アラブ人、タタール人、ペルシャ人、乃至は何世紀も昔から我々にとっては正に窓ごしの隣人とも言えるトルコ人等、ヨーロッパの慣習には充分触れる機会があった筈だが、うす汚れた頭巾、羊皮帽、ターバン等「時代遅れ気味の風習」を捨てようという姿勢は微塵たりともない。洗練された西洋人と接する機会が多かったにも拘らず、彼等はいっこうに伝統的生活様式を崩す気配を示さなかったのだ。

だが日本人は違う。欧州の生活習慣を体験するや否や、そこから何かを学ぼうという気になったのだ。そして我々がウィーンで目のあたりにする以前に、「アジアにおける利発な大英帝国の子孫」は郷土風ガウンや、ぶかぶかズボンやサンダルを捨て、衣装替えをし、ピカピカのシルクハットもかぶり、すっかり欧州の社交界風に着飾ってお目見えしたのである。

変革に対する受容性、実用的かつ美的事項の習得に対する慧眼、全く新しい物と引き換えに昔ながらの慣習を潔く捨てるという姿勢は、日本人のみに見られることである。我々欧州の高度文化諸国も例外ではなく、世界のどの民族においてもこうしたあっぱれな態度は見られない。宗教の事は別として、日本人が西洋のすべてを知り尽くすにも、そう時間がかからないのではないか。

西洋との交流活発化を促進する為、日本の帝はここに描かれた佐野常民をヨーロッパに遣わした。遥かなる島国から赴任したこの大使は、長年のウィーン駐在期間に個人的にも又国家にとっても多くの友好関係を獲得した。

佐野常民はこの度天皇より本国の大臣職を仰せつかり、江戸へ帰還することとなった。我が国の大臣達の政治を傍観したこの人物が、これから3850島から成る帝国の行く末に大きな影響を与えてゆくのである。

佐野常民記念館 【シアター;ナレーション】

令和元年5月1日

欧米列強の圧力に負けまいとさまざまな人々が国づくりに奔走していた幕末。時代の先を見据え、佐賀を日本の指針にしようとした一人の男がいた。決して自分の信念を曲げることなく、日本の近代化に力を注いだ男、佐野常民。彼の歩みはここ川副町から始まった。

1822年12月28日、川副町早津江の下村家で元気な産声が響き渡った。

幼名鱗三郎（りんざぶろう）のちの佐野常民の誕生である。厳格な家庭に育った常民は、幼いころから勉学に励み、難しい学問を習得。9歳になると佐野常徴（さのつねみ）の養子となり医者を目指す。優秀な人材が揃った藩校、弘道館。年長の塾生を上回る成績で頭角を現した。20歳のとき同じく佐野家の養女となっていた駒子と結婚し、医者としての道を歩き始めた。しかし、時代は常民を一介の医者として終わらせることなく、広く世の中で活躍する人となるよう動き始めていた。

西洋の進んだ科学技術を取り入れようとしていた藩主鍋島直正の命を受け、常民は学問の旅に出る。京都では広瀬元恭（ひろせげんきょう）の時習堂、大阪では緒方洪庵（おがたこうあん）の適塾に、そののち江戸に出て東京の伊東玄朴（いとうげんぼく）に学ぶこととなる。常民は、当時の日本を代表する蘭学者たちに学び、広い見識を持って、世の中のことを思い、日本の将来を見つめていた。このころ佐賀藩では、本格的に西洋科学の研究に取り組み、日本初となる鉄の大砲を鑄造し始めていた。

1851年、帰郷することになった常民は、留学中に親交のあった科学者の中村奇輔（なかむらきすけ）と蘭学者の石黒寛次（いしぐろかんじ）、そして西洋機械師でからくり儀右衛門とよばれた田中久重（たなかひさしげ）親子4人を佐賀へ連れて帰ることにした。当時の佐賀藩は、他藩の人間を受け入れることを禁じていた。しかし、常民は優秀な人材こそ、技術革新にぜひ必要であるという強い信念で藩の重役方を熱心に説得して、ついに4人を迎え入れることに成功。

そののち、常民は、さまざまな理化学実験。軍事の研究を行う精煉方の主任に抜擢され、日本で初めての蒸気機関車、蒸気船のひな型を製作する。オランダの協力を得て、幕府は長崎に海軍伝習所を創設すると、佐賀藩はただちに常民をはじめ48人を派遣、最新の航海術、乗船術、砲術、蒸気機関などの学科と実技を幕府や他藩の伝習生とともに学ばせた。佐賀藩伝習生の基礎学力は高く、技術習得にかける情熱は、オランダ教官たちを驚かせた。佐賀藩の科学技術力は、すでに幕府や他藩をはるかに上回っていたのである。

1858年、佐賀藩は三重津に海軍所を創設。のちに、日本海軍の基礎といわれる佐賀藩海軍の誕生である。三重津海軍所の監督となった常民は、西洋の技術を導入し、ここ三重津で、日本人だけの手による、初の蒸気船凌風丸（りょうふうまる）を完成させる。藩のことを思い、近代化に取り残された日本の行く末を案じていた常民は、見事、故郷で西洋の科学技術を形にしたのである。

1867年、常民はパリで行われた万国博覧会で、佐賀藩派遣団の団長として参加。初めて触れる西洋の近代的な文明。ここで常民は、のちの人生を変える運命的な出会いをする。赤十字である。アンリー・デュナンが提唱した「戦場において傷ついたものは、敵味方の差別なく救護する」という理念に大きな衝撃を受けた。

1872年、政府からオーストリア博覧会事務副総裁に任命された常民は、パリ万博の経験を活かし、翌年、ウィーン万博へ政府派遣団団長として旅立った。総勢71人の派遣団を率いて、日本各地の特産品、美術品を紹介、合わせて西洋の先進的な技術の習得に努めた。帰国後、常民は16部門に及ぶ膨大な報告書を作成、同時に各国に広がりを見せていた赤十字事業についての認識を新たにし、日本でもこうした組織が必要であることを人々に説いた。

1877年、常民55歳の時、西郷隆盛らが政府軍と戦った西南戦争が起こり、凄惨な戦況が東京に伝わる。常民は、同じ元老院議員の大給恒（おぎゅうゆずる）と協議して、負傷者救護を目的とする博愛社設立請願書を提出。しかし、敵の負傷者も差別なく救うという考え方が政府に受け入れられず却下される。常民は、あきらめることなく戦地熊本に赴き、政府軍の総指揮官 有栖川宮熾仁（ありすがわのみやたるひと）親王に直接嘆願、即日博愛社設立が許可された。このとき、常民は感極まって涙を流したといわれている。法律の発布や機械の発明が文明開化だと思われるが、赤十字のような人道的国際組織の発展こそ本当の文明開化であると、常民は広く人々に訴え続けた。

1887年、博愛社は日本赤十字社と改称し、国際赤十字への加盟がついに実現。初代社長に就任した常民は、赤十字事業を推進するとともに、明治政府においても数々の要職を務め、日本の近代化に尽力した。

日本海軍創設の提言、洋式燈台の設置、内国勸業博覧会の開催など日本の美術の振興を目的に龍池会（りゅうちかい）を設立。人材育成に務めるとともに、地域の振興にも貢献した。

1902年10月、日本赤十字創立25周年記念式典は、皇后陛下ご臨席の元、盛大に挙行された。このとき、常民は、それまで皇族にしか贈られなかった名誉社員の称号を受けた。それは、彼の歩んだ人生に対する最高の賛辞でもあった。この年の始め、最愛の妻駒子を亡くした常民は、12月7日東京三年町の自宅で80年の生涯を静かに閉じた。

「博愛 これ仁という」仁とは、人をいつくしむこと。近代日本の黎明期、先見と旺盛な行動力で駆け抜けた佐野常民。彼が激動の時代を奔走できたのは、生涯国を愛し、人を愛することを忘れなかったからではないだろうか。



佐野常民

佐野常民と「扶氏医戒之略」

…棄てて省みざるは人道に反す…

平成 30 年(2018 年)11 月 10 日

佐賀市佐野常民記念館 館長 諸田謙次郎

入道研究ジャーナル 2018 VOL.7

日本赤十字国際人道研究センター編集 香稿文

【幼～青年期・外科医を目指す】

佐賀の七賢人の一人、佐野常民は文政五年(1822年)十二月二十八日(太陽暦 1823年 2月 8日)に、佐賀藩士の下村三郎左衛門充實の五男(幼名：鱗三郎)として現在の佐賀市川副町早津江に生まれました。驚く事に同時代の 1820年にはフロレンス・ナイチンゲール(近代看護の先駆者)、また 1828年にアンリー・デュナン(国際赤十字の創始者)が誕生しています。

満 9 歳で下村家の親戚で、佐賀城の東側の枳小路(現、佐賀市水ヶ江 2 丁目)にある佐野家の養子となりました。養父(常徴)は九代藩主鍋島斉直に御匙医師(藩医・外科)として仕えており、鱗三郎は斉直から「栄寿」という名を賜りました。

11 歳の時に藩校弘道館へ通学する外生(小学生)となり基礎の学問を学んだ後、他の生徒より 2 歳ほど早く寄宿生の内生(大学生)に進学を許され、勉学の面で一二を争う秀才として頭角を現しました。寮頭の田中虎六は「栄寿は才の人である。才は離れ易い」と言って警めつつ、力をつくとして薫陶しました。佐野はこの忠言について、後年まで自ら反省の資としたと言われています。

15 歳で江戸の養父のもとへ行き、佐賀藩出身の儒学者で『海防臆測』など著した古賀侗庵の塾に入門し、当時の国際情勢も学んだと考えられます。

17 歳の頃、斉直の死去に伴い、佐賀へ帰る事となった栄寿は再び弘道館で一般の医学を学ぶほか、親戚の松尾家の塾で外科学を修業しました。20 歳の時、6 歳で佐野家の養女となっていた、山領真武の娘で同年齢の駒子と結婚しました。

【転機・蘭学修行の旅】

佐野の転機となったのは、有為の青年を上方や江戸などで学ばせるといふ十代藩主鍋島直正の命により、弘化 3 年(1846 年)、京都の医師で物理学者の広瀬元恭の時習堂に入門し医学の他、物理、管密(化学)、砲術、兵法など最新の蘭学を学ぶ事になったことです。

嘉永元年(1848 年)の秋に大坂の備方洪庵の適々齋塾(適塾・大阪大学の精神的源流)に入門しました。当時の留学は短期間ずつ多くの塾を巡って修行するのが一般的でした。全国から集まった俊才(塾定員 32 名)が勉学の成果を競う生活の中で、洪庵はドイツ人医学者フーフェランドの著書『医学必携・臨床入門』の巻末にある「医師の義務」を医の倫理として大切に塾生たちに教えていました。後に要訳本として完成した「扶氏医戒之略」に【不治の病者も仍其患苦を寛解し、その生命を保全せんことを求むるは、医の職務なり、棄てて省みざるは人道に反す、たとひ教ふこと能はざるも、之を慰するは仁術なり。(後略)】があり、これ等「医師の義務 = 医戒」の倫理観に佐野は大きな感銘を受けていたと思われれます。

嘉永二年(1849 年)三月に紀伊の春林軒塾(麻醉手術で知られる華岡青洲が開いた家塾)。さらに同年には江戸の同郷の蘭方医で、藩主に牛痘種痘

法の実施を献言し、後に將軍侍医長となった伊東玄朴（げんぼく しょうせんどうじやく）の象先堂塾に移っています。学業はますます熟達し玄朴に代講を任される塾頭となりました。また、西洋技術の取得を望む藩主からは、頻繁に種々の質問が師の玄朴に寄せられました。佐野が回答する役目でした。

ペリー来航を間近にし、内外の時勢の急は学問の専念を彼に許さず、1851年に直正から転学・帰国を命じられます。当時の佐賀藩は二重鎮国体制（他領への移住や、他領からの移住の禁止）でしたが、帰路に京都から広瀬元恭門下の田中久重（ひさしげ）（東芝の祖）父子など当代一流の西洋機械師、科学者、蘭学者の4名に独断で佐賀藩入りを熱心に勧めます。一方では藩主の近侍を説得し、直正も必要性を認め、新設した佐賀藩「精煉方（せいれんほう）」（理化学研究所）に、4名を出仕させることに成功します。1853年、藩主自らが「榮寿左衛門」と名を授け、坊主頭を改め蓄を結い、身分は藩医から武士となり、「精煉方」の主任となりました。

【博愛社設立・郷士の誇り】

佐野は適塾入門から19年後、慶応三年(1867年)のパリ万国博覧会で赤字と出会い、明治十年(1877年)、西南戦争の中で実際に人道に基づく救護事業を開始し、棄てて省みられない負傷者の命を敵味方の差別なく救う博愛社を設立。明治二十年(1887年)、日本赤十字社の初代社長に就任し、81歳(歿年)で亡くなる明治三十五年(1902年)十二月七日まで社長を務めました。人を思い、国(藩)を思い、激動の時代を奔走し続けた佐野常民伯爵は郷士の誇りです。

【扶氏経験遺訓と扶氏医戒之略】

フーフェランド (Christoph Wilhelm Hufeland, 独逸人、ベルリン大学教授、内科医、1764-1836) が1836年に出版した『医学必携・臨床入門』(Enchiridion Medicum, oder Anleitung zur medizinischen Praxis)・50年間の臨床医の体験を述べた書をオランダ人ハハーヘマン(H. H. Hageman, Jr)が1838年にオランダ語に翻訳。洪庵は、1842年にはこの蘭訳本からおおむね翻訳を終えていましたが、蘭書出版の検定事情などにより出版までに歳月を要しました。1857年に『扶氏経験遺訓』の一部を出版し、全30巻(医戒の部分は割愛)が訳本として整ったのは1861年のことです。時に『扶氏経験遺訓』(大庭雪斎校訂版)は当時の佐賀藩医学校「好生館」で教科書としても使用されています。

『扶氏医戒之略』は当初の出版年(1857年)の正月、洪庵が『医学必携・臨床入門』の巻末にある「医師の義務」を医の倫理として十二章に要訳、『遺訓』の仕上げとして塾生に示した名著であります。

なお、杉田成卿（せいけい）（杉田玄白の孫）も同書の一部を医戒付で和訳し『済生三方医戒附刻』として1849年に出版していました。

これら医戒は、これからも医療界・社会に多大な影響を与え続けていくことだろうと思います。私の父は昨年7月に91歳で他界しました。この戒めを読むたびに、親身にして頂いた主治医の先生や看護師の方々、また父のことが思い起こされます。ここにあえて博愛社の「人道」の原点ともなった『扶氏医戒之略』全十二章を提示いたします。すこしでもこの博愛の思いに近づきたいと願ってやみません。

通ぜざるべからず。殊に医は人の身命を依托し、赤裸を露呈し、最密の禁秘をも白し、最辱の懺悔をも状せざること能はざる所なり。常に篤実温厚を旨として、多言ならず、沈黙ならんことを主とすべし。博徒、酒客、好色、貪利の名なからんことは素より論を俟たず。

一、 医の世に生活するは人の為のみ、そのれがためにあらずといふことを其業の本旨とす。安逸(あんいつ)を思わず、名利を顧みず、唯おのれをすてて、人を教はんことを希(ねが)ふべし。人の生命を保全し、人の疾病を復治し、人の患苦を寛解する外、他事あるものにあらず。

一、 病者にたいしては唯病者を視るべし。貴賤貧富を顧みることなかれ。長者一握の黄金を以て貧士雙(双)眼の感涙に比するに、其心に得るところ如何ぞや。深く之を思ふべし。

一、 其術を行ふに当ては病者を以て正鰯(せいこく)とすべし。決して弓矢(道具)となすことなかれ。固執に僻せず(偏った考えに囚われず)、漫試を好まず(無闇にあれこれ試さず)、謹慎して(謙虚になつて)、眇看(びょうかん)細密(詳しく見る)ならんことをおもふべし。

一、 学術を研精するの外、尚言行に意を用ひて病者に信任せられんことを求むべし。然りと見えども、時様の服飾を用ひ、詭誕の奇説を唱えて、聞達(ぶんたつ)評判(評判)を求むるは大いに恥じるところなり。

一、 毎日夜間に方(あたり)て更に屋間の病按を再考し、詳に筆記するを課定とすべし。積て一書を成せば、自己の為にも病者のためにも広大の裨益あり。

一、 病者を訪(と)ふは、疎漏の數診に足を勞せんより、寧ろ一診に心を勞して細密ならんことを要す。然れども自尊大にして屢々(しばしば)診察すること欲せざるは甚悪むべきなり。

一、 不治の病者も仍(より)て其患苦を寛解し、其生命を保全せんことを求むるは、医の職務なり。棄てて省みざるは人道に反す。たとひ救うこと能はざるも、之を慰するは仁術なり。片時も其命を延べんことを思ふべし。決して其不起を告ぐべからず。言語容姿みな意を用ひて、之を悟らしむることなかれ。

一、 病者の費用少なからんことを思ふべし。命を与ふとも、其命を繋ぐの資を奪はば、亦(また)何の益かあらん。貧民に於ては茲(ここ)に甚酌(しんしゃく)なくんばあらず。

一、 世間に対しては衆人の好意を得んことを要すべし。學術卓絶すとも、言行嚴格なりとも、貧民の信を得ざれば、其徳を施すによしなし。固く欲情に

一、 同業の人に対しては敬し、之を愛すべし。たとひしかること能はざるも、勉めて忍ばんことを要すべし。決して他医を議することなかれ。人の短をいふは、聖賢の堅く戒むる所なり。彼が過を挙げるは、小人の凶徳なり。人は唯一朝の過を議せられて、おのれの生涯の徳を損す。其徳失如何ぞや。各医自家の流有て、又自得の法あり。漫に之を論ずべからず。老医は敬重すべし。小輩は親愛すべし。人もし前医の得失を問うことあらば、勉めて之を得に帰すべく、其治法の当否は現症を認めざるに辞すべし。

一、 治療の商議は会同少なからんことを要す。多きも三人に過ぐべからず。殊により其人を扱ふべし。只管(ひたすら)病者の安全を意として、他事を顧みず、決して争議に及ぶことなかれ。

一、 病者曾て依托せる医を捨て、ひそかに他医に商(はか)ることありとも、漫(みだ)りに其謀に与(あず)かるべからず。先其医に告げて、其説を聞くにあらずれば、従事することなかれ。然りといへども、実に其誤治なることを知て、之を外視するは亦医の任にあらず。殊に危険の病に在ては遲疑することなかれ。

右件十二章は扶氏遺訓巻末に附する所の医戒の大要を抄訳せるなり。書して二三子に示し、亦以て自警と云爾(しかう)

安政丁巳(1857) 春正月 公裁誌(しるす)

※上記『扶氏医戒之略』の括弧の記載は本文にはないものです。

最後になりましたが、寄稿文を書くにあたり左記の文献・ウェブサイトを参考といたしました。執筆者の皆様には感謝いたします。特に、吉川龍子

様には貴重な御教示を頂戴いたしました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

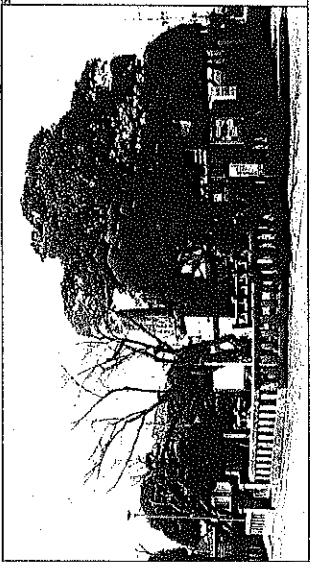
- 北島磯舟『日本赤十字社之創立者 佐野常民傳』1928年 野中万太郎発行
本間樂寛『佐野常民傳』—海軍の先覺・日本赤十字社の父— 1943年 時代社
吉川龍子『日赤の創始者 佐野常民』2001年 吉川弘文館
福岡博『佐野常民ものがたり』2010年 佐野常民顕彰会
青木歳幸『通塾の歴史的评价について』—地方出身門人の活動から—
会誌「通塾」第50号 平成29年12月1日発行 通塾記念会出版 89-105項
岩瀬光『緒方洪庵と「扶氏医戒之略」』2003.11 東京保険医協会発行
月刊誌「診療研究」第392号 50-51項

ウェブサイト参照

- 浅井 允晶 日本医史学雑誌 第58巻第3号 (2012) 389-392 通塾記念会 緒方洪庵全集編集委員会
『緒方洪庵全集』第一巻・第二巻 『扶氏経験遺訓』上・下) —刊行に寄せて—
http://jsmh.umin.jp/journal/58-3/58-3_389-392.pdf (2017年12月28日閲覧)
通塾—大阪大学 洪庵の業績
<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/about/tekijuku/achievements.html>
(2017年12月28日閲覧)
高槻大学医学部 地域医療教育学講座 医の倫理
<http://www.shimane-u-education.jp/20.html> (2017年12月28日閲覧)

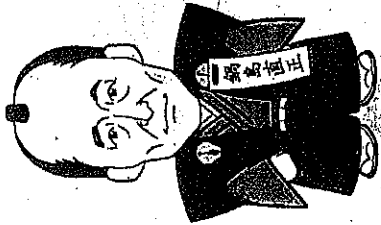


「扶氏経験遺訓」
佐野常民記念館蔵



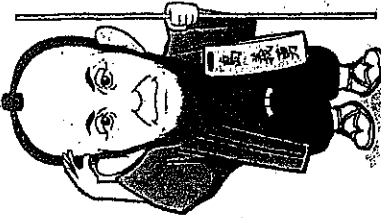
佐野常民の生誕地 (土地:日本赤十字社所有)
平山成信社長出席により大正15年(1926年)12月16日に記念碑除幕

日本の国家建設に力を発揮した偉人たちがいました。この人たちを「佐賀七賢人」といいます。



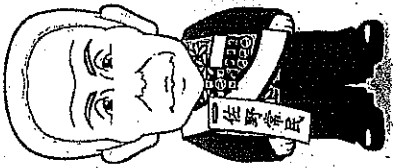
なべしま なおまさ
鍋島直正 57

- 1814生～1871没
- 佐賀藩(全国第8位の規模)の第10代藩主・新政府最高位の大納言になった人
- 日本で最初に西洋医学と科学技術を取り入れた人
- 日本で初めて鉄製大砲をつくり、蒸気船の建造に成功した人



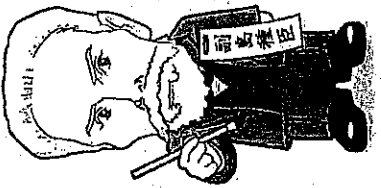
しま よしたけ
島義勇 52

- 1822生～1874没
- 北海道と樺太を探検調査した人
- 北海道の開拓判官(開拓の責任者)となり札幌を中心に都市建設をおこなった人
- 明治天皇の侍従(そば近くに仕える)となった人



さの つねたみ
佐野常民 80

- 1822生～1902没
- 佐賀藩(日本の科学技術の発展に大きく貢献(役立ち)ように力をつくす)した人
- 日本の博覧会・博物館の生みの親となった人
- 日本赤十字社を創設した人



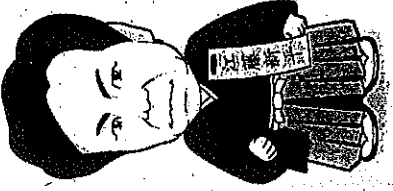
そえじま たねおみ
副島種臣 77

- 1828生～1905没
- 外務卿(外務大臣)となり国際的な外交で活躍した人
- 明治天皇の侍講(学問の講義をする)となった人
- 書家、漢詩人



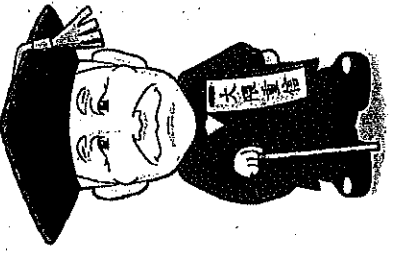
おおき たかとう
大木喬任 67

- 1832生～1899没
- 初代文部卿(文部大臣)になった人
- 西洋式近代教育の基礎をつくった人
- 日本全国に学校をつくり教育を受けさせる「学制」を整備した人



えとう しんぺい
江藤新平 40

- 1834生～1874没
- 初代司法卿(法務大臣)になった人
- 近代司法制度(民法・刑法・裁判所・警察など)の基礎をつくった人
- 鍋島直正公の葬儀を主宰(全体をとりまとめる)した人



おおくま しげのぶ
大隈重信 64

- 1838生～1922没
- 日本初の政党内閣をつくった人
- 大蔵卿(大蔵大臣)として活躍し総理大臣に2回なった人
- 早稲田大学を創設した人

枝吉神陽

えだよし しんよう

江戸時代後期の幕末に活躍した佐賀藩の思想家、

教育者、国学者。藩校弘道館の教諭。外務卿、

内務大臣を務めた副島種臣は実弟。本名は経輝。

聴従四位。佐賀の尊皇派の中心的存在。

生年月日：1822年7月12日 死没：1862年9月8日

